

皆様おはようございます。急に寒くなって参りました。あと1週間で10月も終わり、11月。今年もあと2ヶ月と言うところです。寒い日々ですがどうかご健康にご留意ください。

1週間とんで、またステファノの記事に戻って参りました。先祖イスラエルの父祖たちの出来事を通していつも預言者が虐げられ排斥され、人々は目先の事ばかり考えて神様の僕を退けてきました。その出来事をステファノが語りました。その頑さから悔い改め救いを得るために、イエスキリストにある神様の愛を知りその贖いを自らのものとする事ができるようにとステファノは語りましたが人々はそれを受け入れませんでした。そしてステファノは殺害されました。人々は当然自分たちが正しい罰を下しているのだと思いましたがそれは人々が自らの罪を増し加えた結果となりました。しかしそれでもステファノは最後の生きる力を振り絞って大声で主よ、この罪を彼らに負わせないでくださいと叫びました。激痛とそして失われつついく意識の中で彼は最後に許しの執り成しの祈りを捧げました。最後なのだから、怒りの感情のままに恨みを語る事もできたでしょう。怒りを語るのではなく死ぬ前の言葉にその人の真実が出て参ります。彼の心の中にあるのは、まさしく慈愛の心、心配の心、愛の心でした。プライドが、意地が語らせたのではなくて、挑戦心はなくて、敵対心ではなくて、彼の説教を導いたのは、神の愛の心でした。

イエス様の愛の心、贖いの心をしっかりと自分のものにしていたステファノの中心にはいつも神様の愛が宿っていたということをもがまがと見せられるのです。私たちもどんなときにも聖霊にあって主イエス・キリストの進まれた道を辿らせていただきたいと願うばかりです。

さてこの後8章に入りますけれどもサウルが登場いたします。サウルはステファノの殺害に賛成していました。ステファノは誤っている。そしてイエスキリストも神を冒瀆するペテン師であるということを彼は信じきっていました。そしてステファノをきっかけに堰を切ったようにエルサレムの教会に対して大迫害が起こりました。使徒たちの外は皆ユダヤとサマリアの地方に散らされていきました。住む所も仕事も追われ、いられなくされてしまったこの屈辱と悲しさ。そうするほかない危険の中にあって散らされ逃げていった彼らの姿があります。教会への大迫害が起き、エルサレムからユダヤとサマリアの地方へクリスチャンたちが散っていきました。いわゆる都落ちです。

2節しかし信仰深い人々がステファノ葬り彼のことを思って大変悲しんだとあります。信仰深い人々これはユダヤ人のクリスチャンを指すと言う注解がありますけれども、ユダヤ人の人たち信仰深い人たちがステファノ葬り、彼のことを大変悲しんだこの行為は、反体制の所業を肯定するとのことで、自分たちに

も火の粉が及ぶ危険がありました。けれども信仰深い人々はステファノを葬り、彼のことを思って大変悲しみました。

自分の命を危険にさらしても救いの言葉を語らなければならないと、身を捧げたこの殉教者のために、彼の辛さを痛みを思って大変悲しむ、その信仰の姿がここに書いてあります。

讚美歌 312 番いつくしみ深きという曲がありますけれども、その 3 番ですがこうあります。「いつくしみ深きともなるイエスは 変わらぬ愛もて導きたまわん 世の友われらを捨て去る時も 祈りに答えて労わり賜わん。」

友として長年信頼していた、そして一緒に進んだ友がある時袂を分かつ時があります。あるいは裏切り見捨てられることかもしれません。

知らない人から冷たくされることは我慢できても、友と思っていた人から見捨てられることは大きな痛みだと思います。しかし、友なるイエス様は変わらぬ愛をもって導いてくださるのです。危険をも顧みず、絶対に私たちを見捨てない、ご自分の命を捨てても私たちを愛してくださるお方がいらっしゃるのです。イエス様が友でいて下さるのなら、私たちは共から見捨てられても絶えることが出来るのです。

しかし、ここには迫害をも恐れずに彼のために心枷痛み、涙を流す友がいました。本当にステファノのことを痛む友が残されていました。

大迫害が起こりました。人々は散らされました。しかしここに、彼のことを、ステファノのことを思って大変悲しむ人が残されていました。私たちも、そういう真実の友でありたいと願います。

そして、このようなけなげな教会にさらに鞭を打つ出来事が起こります。

3 節一方サウロは家から家と押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた、とあります。サウロはステファノの殺害に賛成しており、そしてさらにキリスト者たちの家から家と押し入って男女問わず引き出して牢に送っていたとあり、この活動の中心的なメンバーにサウルがいたということがここに書き表されています。

「教会を荒らし」と書いてありますがこの「荒らす」という言葉は、野獣が人間の身体を傷つける時の荒々しい様子を示す言葉だそうです。野獣が人間に襲いかかり、人間は抗う術もなく、その鋭い爪の餌食となり、次々と体を引き裂かれ、そして野獣は何も抵抗することのできない人間に次々と容赦ない攻撃を加えて人の命を奪っていく。風前の灯となっていくその人間の弱い姿そして圧倒的な野獣の攻撃力、そのような状況の中で教会もまた荒らされ、そして男女問わず引き出され牢に送られて、その牢の中では文字通り殉教が待っていた、そういう人々もあったと思います。

本当にステファノの事柄を通して野獣が希望を牙を野獣が牙をむいて教会におそいかりその命を亡き者にしようとするその凄まじさがここには記されています。しかし4節からはそこに働かれる神様の働きが記されています。エルサレムを離れユダヤとサマリアの地方について行ったその人々は福音を告げ知らせながらめぐり歩いたとあります。

福音は神様の与えたもう良き知らせを意味します。グッドニュースを意味します。しかし、ステファノが殺害され正しい預言者が血祭りにあげられ、そしてエルサレム教会には大迫害、そして家から家へと野獣のように迫害者が押し入って教会を荒らし痛めつけ、投獄して命を奪うという、そのような猛威が吹き荒れているこの状況の中で、自分の住んでる所を追われ散らされ、先の保証もなく進んでいく彼らがどうして福音の良い知らせを伝えることができたのでしょうか。それでも良い知らせを信じていると彼らは信じることができたと言うのでしょうか。

そうです彼らは微塵も神様のお力を疑うことをしませんでした。それでも彼らにとってはイエスキリストの福音は輝ける素晴らしいものでした。イエス様の十字架のお苦しみに近づかせていただいているんだと、彼らはむしろ喜びキリストと共にあるこの苦しみの中に自らが神様に引き寄せられていることを実感しました。曲がった時代であればあるほど、暗い世であればあるほど、このイエス・キリストによる神の御救いの良き知らせを伝えなければならないと、奮起していました。この聖書の言葉は非常に慰め深い言葉です。

フィリポは5節、サマリアの町に下って人々にキリストを宣べ伝えたとあります。サマリアの街は北アッシリアによって多くの人々が外国から連れてこられ、民族的にも宗教的にも入り混じった町となっしまい、ユダヤの人たちから軽んじられていました。このように、ユダヤとサマリアの住民の間には越えがたい溝が存在しており、両者に交流はありませんでした。サマリア人もまたエルサレムに対抗して彼ら自身の礼拝所を山に建て、救い主の到来を期待していました。それらの話はサマリアの女性とイエス様との会話にも、またよきサマリア人の例え話にも出てきます。

しかし期せずしてこの散らされたことによってエルサレムからユダヤ、サマリアの地に福音が語られることになりましたこれは使徒1章でイエス様がおっしゃったことの成就となります。

1:8 「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」このことが成就せられる事でした。

8:5 フィリポはサマリアの町に下って、人々にキリストを宣べ伝えた。

8:6 群衆は、フィリポの行うしるしを見聞きしていたので、こぞってその話に聞き入った。

フィリポはしるしを行っていました。奇跡的なしるしです。神様が行わせるその不思議なしるしです。

エルサレムでは迫害と破壊が続いていました。ずっと続いていました。いつ終わるのかわからないその迫害の中で逃れた人たちは、散らされた地でキリストの良い知らせを伝え続けました。諦めることなく神様の霊の働きによって彼らはくじけることなく倒れることなく証し続けました。そこに、聞く人々はずっと注目し続けていたのです。一つ心で、一緒になってサマリアの人たちは固唾を飲んで聴き続けていました。そこにフィリポが行い続けているその奇跡的なしるしを見たり聞いたりするところとなりました。散らされてやってきたその彼の苦しみの中にある存在でしたが、しかし神様のしるしが伴っていて、力ある言葉が語られ、そして実際の出来事が彼には伴っていました。

クリスチャンと言うのはそういう存在であるということがわかります。目に見える様々な困難の状況はあれどその中でなお私たちは変わることなく神様の福音の良き知らせをお伝えし続ける事が許されています。時が良くても悪くても御言葉を語り続けるという、そのところに神様が奇跡的なしるしを伴わせてくださるのです。そのキリスト者の言葉を行いを必要としている人がおられる、こぞって聞き入っている人がいるんだと言う事ですね。私たちが信じているこの福音の事柄は、私たちだけのものではなく多くの方々や全ての方々のために与えられている神様の恵みであるということを信じたいと思います。

この方々には通じないんじゃないか、この方々は耳を傾けないんじゃないか、この方々にとっては私たちが語るこの確信なんて意味がないことなんじゃないか、理解されないんじゃないか、私たちのこの信仰は日本の国の中では意味がなく、働きは大きくなっていくものではないか、また私たちの個人的な生活の中で私たちを意気消沈させるいろいろな出来事の中で私たちはその中で力を失ってしまう時もあるかもしれませんが、それでもなお散らされてもなお荒らされても、ともに捨てられても、なお牢に送られて痛みの中に辛さの中で大変な悲しみの中にあろうともそれでも福音は輝き続けているんだ、それを人々に述べ伝え続けていくときにそこに必ずその話に聞き入ってくださる方がいるのだ、じーっと注意を払って見続け聞き続けてくださる方がおられるとすることを信じて、私たちは勇気を得て進ませてもらいたいと思うわけです。

群衆はフィリポの行うしるしを見聞きしていたのでこぞってその話に聞き入っていました。しかし人間には奇跡的なしるしを行う力なんてありません、奇跡

を行う力なんてありませんと思われるでしょう。その通りです。フィリポにも私たちにも人間にはそのような力を与えられてはいません。

しかし逆境の時にも大迫害の時にも散らされても、荒らされても、牢に送られても、それでもなおイエスキリストには力があるのです。イエスキリストは十字架につけられ、よみに降られましたが3日目に死人の中からよみがえられお方です。このイエス様の福音、良き知らせ、イエスキリストにある神の救いをそれでもなお語っていこうと思う人のためには、神様が加勢してくださる、助けてくださることを私たちは信じて進んでまいりましょう。真剣に祈り願って、その目の前にいる苦しんでいる方々のために助けてくださいと祈るなら神様は聞いてくださいます。

8:7 実際、汚れた霊に取りつかれた多くの人たちからは、その霊が大声で叫びながら出て行き、多くの中風患者や足の不自由な人もいやしてもらった。とありますように実際本当に多くの方々は苦しみの中にありました。汚れた霊とありますが、「汚れた」と言うのはギリシャ語の意味にはこういう意味もありません。それは、「神様との関係無き」という意味です。私は神様とは関係ないと自分が神様を必要としないと思わせるのが汚れです。神様になど願わなくても自分は自分でやっていけるんだという、人の傲慢です。そして、神に仕えることを拒絶し、もともとは光の御使いであったにもかかわらず墮落したサタン悪魔のおごり、これが汚れたという言葉の意味です。

神様と関係なく人間は幸せに生きていけるんだ、人間の力はそれぐらい立派で大きいものなんだ。それが不遜な考え方であってそれは汚れた心の考え方であり、そういうことがこの「汚れた」と言う言葉から見えてくる思いがいたします。そしてその神様を必要としないと言う人間の考えの中にあって人が生きていこうとするとき、きよい神の霊を退けて生きようとするときに苦しみがあります。取りつかれた多くの人たちは幸せな方向に生きることができず、破滅を願うサタンによって引き寄せられそして人生のあらゆる苦しみに陥っていました。野獣に切り裂かれるように傷ついていました。自分が思った良いことをしようとするのができない反対の反対の方へと足を引っ張られてしまう泥沼の方向へと破滅の方向へと抜け出そうと思っても抜け出すことができない、そういう神と関係ないと公言する汚れた霊にとりつかれた人たちは人生を苦しんで生きていました。

しかしフィリポがイエスキリストにある神の福音、良き知らせを語る時それは汚れた霊は、イエス・キリストの御名の前で大声で叫びながら出て行きました。多くの中風患者、足の不自由な人、医学ではどうすることもできない人たちもイエス・キリストの御名によって癒してもらえました。

現代の科学はこのころから見たら飛躍的に向上しているのですが、それでもなお癒せない病があります。しかし私たちはイエス様の御名を持っています。喜びの良きおとずれである福音を持っています。

福音に出会って街の人々は大変喜びました。心の中にはびこっていた汚れた霊は、病は追放されました。ずっと占拠していた、出て行かないぞとずっとお前と共にいてお前の破滅を見届けるんだという恐ろしい霊は、次々とはかり知れず出て行きました。

サマリア人をユダヤ人は軽蔑しましたがそのユダヤ人が追放したこのイエス・キリストの名におけるこの力強さはサマリア人たちを救いました。

これこそが神様のもたらす力であり、頑迷な受け入れない人たちが退けたそのイエスキリストの御名が彼らにとっては救う出来事でした。この事柄は大きな意味を持つものとなりました。その様を見て追放したエルサレムの指導者たちは恥をかくことになり自分の過ちをさらけ出すことになりました。

そして世界の広いところにイエスキリストの御名が述べ伝えられていき、神様は苦しみの中にあってもあきらめずに涙を拭って進む民とともにあり、そして傲慢なものを悔い改めさせそして苦しめる人たちを癒しそしてご自分の素晴らしさを世界に広げていけます。

私たちも大迫害のような苦しみの中で知らされる痛みそして荒らされ痛め付けられ血が流れそして牢に送られるような辛い境遇の中にあって大変な悲しみがあり痛みがあり涙があるその時にも、なおも福音を告げ知らせながら巡り歩いていきたいと思うのです。そこに神様が必ずしるしを行ってくださり、苦しめる方々への解放があり人々の大きな大きな喜びがそこにはあります。

ここに遣わされたことに意味があり、私たちが迫害されたこともまた意味があるのです。この散らされて出会う人々に祝福を与えるために神様は私たちをここに遣わされるのです。苦しみもまた益なり。神様は全てのことを働かせて益としてくださるお方です。そのお方を信じ、どんなことが起ころうと私たちはイエスキリストにある力強い神の救いそして良き知らせを語り注いでいきたいと願うものです。